

ハヤテのごとく!!

# 合同小説本

Vol. 3

大和撫子



# 目次

(著者名は敬称略)

表紙イラスト・本文挿絵…大和撫子

## 二次元と三次元

著者：kull 3

## 放課後

著者：きは 11

## 京アニがアニメ化とかしてる方の日常

著者：ロッキー・ラックーン 14

## くのいち vs カウガール

著者：RIDE 23

## あの頃には戻れない

著者：双剣士 31

## 著者あとがき & メッセージ

42

## 編集後記

46

## 奥付

46

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第3回クイズ大会（2013年11月2日）にて上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/quiz03/>

## 二次元と三次元

著者：kull

「おはよう、春風さん。」

「おはようございます、先輩。」

アニメイト。そこは秋葉原屈指のアニメ好きが集まるアニメ好きのパラダイス。

特にやりたいことも無く、アニメが好きな僕はそこで仕事をしていた。

「春風さん、早いね。まだ開店前なのに・・・。鍵、開いてないでしょ？」

「在庫、確認したくて・・・。仕事熱心な先輩なら、早く来ると思ってたってました。」

そう言って春風さんはこちらへ笑いかける。

この笑顔に何度癒されたことだろうか。

「そ、そう・・・。じゃあ、今開けるから。」

そういつて鞆から鍵を取り出して裏口を開けると、春風

さんは急ぎ足で入っていった。

まだ入って間もないバイトなのにその熱心さはこちらが見習うほどだと感心する。

（春風さん、やっぱり可愛いな・・・。）

以前、僕は春風さんに告白しようとしたことがあった。その時は自分の家の前で、彼女の好きなアニメのVHSを貸して、我ながら良い感じだと思っていたんだけど・・・。

『一緒に住んでる男の子からです。』

自分が告白する前に言われたこの言葉のせいで、僕は告白する気を失ってしまった。

あれだけ可愛いんだから、同棲くらいしてても不思議じゃないかもしれない。

（やっぱり、こんな自分じゃダメなのかなあ・・・。）

生まれてから23年、女子と話した時間は延べ5分。

特にスポーツも出来ず、ルックスも微妙、好きなものはアニメなどの二次元系くらい。

そんな自分では、やはり彼女には不釣合いなのだろう。だが……

『いーえ、頼りにしていますよ、先輩。』

『先輩は、優しいですね……。』

ネガティブな思考に陥る度に春風さんのこの言葉が脳裏をよぎる。

かつて、自分が二次元以外のものにここまで心を動かされたことがあったのだろうか。

三次元の女の子に、ここまで好感を持ったことがあったのだろうか。

（ま、僕がそんなことを思ったって、何の意味もないんだろうけど……。）

そう思って新刊の漫画や同人誌などを陳列していると、不意に春風さんが視界に入った。

お客さんから何か聞かれているようで、対応に困っているようだ。

「くくの漫画って、ありますか？」

「え？えーと……。ここかな……。あれ、違ったっけ……。」

「その漫画なら、こちらに置いてありますよ。」

「あ、本当だ！店員さん、ありがとうございます！」

聞かれていた漫画の置き場所を教えてあげると、お客さんはそれを取りレジへ向かっていった。

「はー、ありがとうございます、先輩。ちょっと分からなくて、焦ってました。」

「うん、マイナーなものだったから、仕方無いよ。」

「いや、本当に助かりました……。先輩って、本当に頼りになるんですね……。」

満面の笑みでお礼を言ってくる春風さんはとても可愛くて。本当に魅力的で。

それを見てみると照れて顔が赤くなっていることがバレてしまいそうなので、僕はそそくさとその場を去った。

夕方。その日の仕事が終わりに、支度を整えて帰ろうとすると、裏口の前に春風さんが立っていた。

「先輩、さつきは助けていただいて、本当にありがとうございます。ございました……。前と同じで悪いんですが、これ、どうぞ。」

そういつて春風さんは缶コーヒーを僕に渡してくる。

「え・・・、ありがとう。でも、春風さんって確か二時間前にバイト終わったはずじゃ・・・？」

「はは、そうなんですけど・・・。先輩にお礼がしたくて、待ってました。」

ちよつと恥ずかしそうに笑う春風さん。  
その姿はやっぱりとても可愛かった。

春風さんから貰ったコーヒーを飲むのがもったいないなあ、なんて悩みながら家のポストを覗くと一枚の封筒が入っていることに気付く。

(あ、これ・・・。)

その封筒の中身は以前に応募したアニメ映画の試写会のチケットだった。

当たればいいや、程度で感覚で応募したのだが、運良く当たったようだ。

(これ、ペアチケットか・・・。でも、一緒にアニメ映画見てくれる人なんて・・・)

その時、ふとある女の子の顔が思い浮かんだ。

「あの、春風さん・・・。」

「はい？どうしました、先輩？」

次の日の昼休み。

僕は昨夜届いた試写会に春風さんを誘うことにした。

「あの・・・アニメの試写会のペアチケットが当たったんだけど良かったら一緒に・・・!」

「春風さん! ちょっとこっち手伝ってー!」

全てを言い終わる前に、レジの方から店員の大きな声が聞こえてきた。

ただでさえ勇気が無くて力の無い僕の声は、その声に遮られ、春風さんには届かなかっただろう。

「はーい、今行きまーす!」

レジへ向かう春風さんの後ろ姿を見ながら僕は立ち尽くすことしか出来なかった。

前に海へ誘おうとした時もそうだ。

毎度毎度、こんなに上手くいかないなんて、やはり僕にはこういうのは向いていないのかもしれない。

(やっぱり、一人で行くことにしよう・・・)

そう決心し、自動販売機で缶コーヒーを買おうとしていると、春風さんが息を切らしてこちらに走ってくる。

「ど、どうしたの? そんな急いで・・・」

「だって、まだ先輩のお話が終わってないみたいでしたから・・・もしかして、終わってました?」

「い、いや! 終わってない!・・・アニメ映画の試写会、一緒に行ってくれないかな!」

精一杯の勇気を注いで放った自分の言葉に、春風さんは笑顔で答えてくれた。

「私なんかでいいですか?・・・それなら、是非!」

試写会当日。

今までに無いほど服装と髪型に気を使い、出来るだけ身だしなみを整え、僕は待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所で待っていた春風さんはいつもと変わらない服装だったが、僕にはいつも以上に可愛く見えた気がした。

「ごめん、春風さん、待たせたかな・・・」

「いえ、私も今来たばかりですよー。」

こんなどこかで聞いたことのあるような会話も僕にはずつと縁が無いと思っていた。

喜びと緊張で胸が張り裂けそうである。

「私、このアニメ好きだったんですよー。映画も楽しみだったので、試写会行けて嬉しいですよ。」

「そ、それなら良かった。応募した甲斐があったよ。」

そんなぎこちない会話をしながら僕らは会場へ着き、試写会を終えた。

映画の出来は素晴らしく、春風さんも満足してくれたようだ。

「いやー、凄いい良かったです！誘ってくれて本当にありがとうございます！」

「あ、ああ・・・こちらこそ一緒に来てくれてありがとう・・・あと、実は僕・・・」

今しか、無いと思った。

二人で出かけ、春風さんの機嫌も良く、最高のシチュエーション。

例え彼氏がいたとしても、自分の本心を伝えるには今がベストだと思った。

「僕は、春風さんのことが・・・!!」

ドン!!と誰かと肩がぶつかった。

想いを打ち明けようとすることに夢中になり、下を向いていたために前方への注意が散漫になっていたみたいだ。

「あ、すみませ・・・」

「おい!どこ見て歩いてるんだよ!」

どうやら運悪くぶつかったのは今時珍しい、ガラの悪い不良のようだった。

い、今時こんな人がいるのか・・・と思っていると、不良はさらに因縁をつけてくる。

「おいおい、ぶつかつたからには金貰わないとなあ・・・？」  
「え？え？いや本当にすみません・・・！」

今までこういう人種とは極力関わらないようにしてきた自分にとつて、不良はとても怖かつた。

どうしよう、どうしようと、慌てていると、春風さんが一歩前に出て反論する。

「謝ってるんだから、お金とる必要は無いと思いますけど。」

「つべこべ言うんじゃねえよ！・・・って、この女、良く見たら結構な美人じゃねえか・・・。どうだい？俺と遊ぶかい？」

金が取れないと思ったらしい不良はターゲットを春風さんに変更したらしく、強引に手を取ろうとする。

「・・・つ、やめてください！人、呼びますよ！」

「誰も助けようとなんかしらないって。ほら、この兄ちゃんもビビッと動けないじゃねえか。」

悔しいけどその通りだった。怯えて動けなかつた。

中途半端に何かしようなものなら、返り討ちにあつて痛い目を見るのが安易に想像できる。

(・・・それでも、それでも春風さんだって勇気を出して反論したんだ！ここで勇気を出さずにいつ出すんだよ！)

「やめろ！」

全身全霊をこめたタツクル。

意表をつかれたらしい不良はモロにタツクルを受け、後ずさりをする。

「なにしががる！・・・やっぱ、痛い目見ないと分からないようだな。」

力の無い僕のタツクルでは不良を追い払うことなど出来なかつたようだ。

万事休す。素直に殴られるしかないのか。それでも、好きな人を庇って殴られるなら悔いは無い。



「千桜さんに、手を出すなあ！」

突然、黒い執事服を着た少年が颯爽と現れて不良に蹴りを入れる。

自分のタックルとは段違いの痛さだったようで、不良は何か言いながら逃げてしまった。

「千桜さん、お怪我はありませんか？」

「あ、綾崎くん!? 何でこんなところに・・・。」

「アパートの住人が困っている時には、いつでも駆けつけるのが執事なんですよ♪」

「あの・・・春風さん、この男の子は・・・?」

「ああ、この人は前に言った、一緒に住んでいる男の子です。」

「君が・・・。ありがとう、僕には何も出来なかったよ。」

「いえいえ、あなたが勇気を出して不良を止めていなかったら、僕でも間に合いませんでした。」

(そうか。この人が春風さんの彼氏か・・・。)

格好良くて、気の利いた台詞が言えて、強くて。どれも自分には無いもので、少し嫉妬してしまう。

「ううん、僕のしたことなんて、何の意味も・・・。」

「先輩、庇ってくれてありがとうございました。：凄く、格好良かったですよ。」

言いかけの僕の言葉を遮って、春風さんは笑顔で言った。

「それで、さっき何か言いかけてましたけど、あれ、何だったんですか?」

「・・・ううん、何でもないよ。」

春風さんの笑顔を見て、気付いてしまったのだ。

もし僕が告白したら、彼氏がいる春風さんは断るだろう。気まずくなつて、バイトを辞めてしまうかもしれない。

そうなって二度とあの笑顔を見れなくなるくらいなら・・・。告白なんて、しないほうがマシなのだ。

僕は今まで通りの、「頼りになる先輩」で、充分だ。

でも、違った。

会いたい時に会えないし、何を考えているか分からないし、自分の思うようにはいかないけれど。

それでも、僕は春風さんを好きになった。三次元の女の子を好きになった。

好きなのに上手く気持ちを伝えられない、上手く話せなくてもどかしい、そんな気持ちを教えてくれた。

23年間、女子と話した時間は延べ5分。

こんな僕でも受け入れてくれて、いつだって夢を見せてくれる、そんな二次元の世界が僕は大好きだ。

会おうと思えばいつでも会えて、いつだって可愛いキャラクター達がいれば三次元の女の子はどうだっていいと思っていた。

今までも、そしてこれから、三次元の女の子を好きにはならないだろうと思っていた。

そんな春風さんへ、僕が出来る恩返しは、少しでも「頼りになる先輩」でいることなのだろう。そう思った思いで、僕はまた開店前のアニメイトへ向かうのだ。

「おはよう、春風さん。」

「おはようございます、先輩。」

## 放課後

著者…きは

瀬川泉は懸命に体重をかけながら、校舎の玄関のガラス戸を押し開ける。足元には乾いた冷気が流れ込んできたが、彼女はそれを意にも介さずそのまま校舎の外に出た。

ふと空を見上げると、そこには漆黒を覆いつくさんとする数多の星々がひしめいている。

東京の杉並区においては滅多に見かけない夜空であるが、同じ地域でも小高い山にある白皇学院の敷地内では、特別珍しくもない光景であった。

「もう、夜だね」

ぼつりと、泉は呟く。いつのまにか夜だった、という感慨がそのまま口について出た。親友の二人から押し付けられた仕事は、二人がかりで二時間ほどかかってしまった。始めた時に西へと沈みかかっていた太陽は、既に姿を見せなくなっている。

「ええ、もうすぐ冬ですね」

泉の後に続いて外に出た綾崎ハヤテが、彼女の独語を拾う。彼が羽織っている緑色のジャケットの胸元には、普段着でもある執事服の赤い蝶ネクタイが顔を覗かせて

いた。わがままな主の執事をしている彼は用意周到に、冬の訪れに際しても準備を怠っていないかった。

「寒いのは苦手だよ」

「にはは」と声を出して泉は笑顔を浮かべるが、寒さからか表情はぎこちない。執事服の上からコートを羽織っているハヤテとは対照的に、泉は学校指定のセーラー服を身に着けている。淡いピンク色のスカートの裾と水玉模様のハイソックスの間は素肌が晒されている。

急に強い風が吹き抜けていった。泉のスカートが波打ったようにはためいて、紫色の髪が揺れる。泉は小さい悲鳴を上げた後、両手を擦り合わせて息を吹きかけた。突風は今の彼女に酷く堪えようだ。

身体を縮こませて小さく震えている泉を見て、ハヤテは自分のジャケットを脱ぐ。そして、襟元を持って何回か軽くはたいてから、「どうぞ」と泉に差し出した。若干くたびれているジャケットと柔和な笑みを見せているハヤテの顔と、泉は視線を交互に移す。相手への配慮から来る戸惑いの色が、生来持ち合わせている彼女の紅い瞳をより鮮やかにさせる。

「僕は平気ですから」

少女のためらいを見透かしたハヤテは、念を押すように微笑みかける。それに対して、泉は辺りを見回した。

ハヤテに向けられていた配慮は、次は周囲に拡散する。

——もしも、誰かが見ていたら。

彼女の頭によぎった不安は、しかしただの杞憂に終わる。放課後から二時間も経過していれば、特別な用事がない限り人影など見当たらぬ。安堵した泉はハヤテの厚意に甘えることにした。彼からジャケットを受け取り、袖を通していく。泉はハヤテより一回り小さい。ジャケットは彼女のスカートを隠し、膝頭を覆う位置にまで達している。

泉は両方の袖を少しまくって袖口をつまみ、胸元に重ねた。

「あったかい」

思わず口から零れていた率直な言葉。ジャケットの防寒性による暖かさもさることながら、自分の身をいわずに尽くしてくれる彼の「あたたかさ」は、泉の顔を綻ばせる。

——だから、好きになったのかな。

ハヤテのことが好きだと、自身の中で再確認する。そう考えれば、親友二人から仕事を押し付けられたことによつて彼と一緒に帰る機会が得られたと、泉の内心は高揚していた。

「風邪をひいてしまわない内に、早く帰りましょうか」

「うん、でも私は折角だからゆっくり帰りたいな」

「……寒いのが苦手ではなかったのですか？」

ハヤテの怪訝な表情を見て、泉はつい本音を口に出したことを後悔した。寒さが苦手であることよりも、数少ないチャンスを満喫したい。そう思つて口から出した言葉である。矛盾をはらんでまで自分の気持ちを表現することは、あまりにも露骨過ぎるのではないだろうか、泉は冷静になつて考えを改めようとする。

——いっそ、このまま想いを告げてしまった方が。

という考えを封殺し、泉はその場をごまかすために理由を探し始めた。校舎から校門に続く舗道は緩やかに右へと湾曲しており、生い茂っている森によつてここからは校門を直接目にすることはできない。彼と別れてしまふ校門までの道程に想いを馳せながら、泉は舗道の両脇に並び立つ街路樹と電燈に目が留まった。目を凝らせば、紅葉や銀杏の木が交互に続いていた。秋色に染まった葉は電燈の光に照らされて、葉脈が透けて見えるほどである。

泉は一步前に出て、紅葉を指差した。

「ほら、紅葉が綺麗なのはきつと今日が最後だから、さ。夜の紅葉狩りもオツなものですよ」

あえてハヤテに顔を見せず、紅葉を見つめながら泉は

言った。そのしどろもどろな口調から、普段通りの彼女であるとハヤテは納得した。

「解りました。ならそうしましょう」

「うん。お願い」

ハヤテの動きに合わせるように、泉もおもむろに歩き出す。一緒に並ぶわけでもなく、一步分の距離を保ったまま二人は歩く。

紅葉よりも、自分の瞳よりも紅く染まった彼女の顔を、電燈はどのように照らしているのだろうか。

皆様ごきげんよう。アリス（仮名・実年齢16歳）でございます。実は今、私は非常に困っておりますの…大事件です。

## 京アニがアニメ化とかしてる方の日常

著者：ロッキー・ラックーン

本日の起床：正午。あいも変わらず、派手に寝過ごしてしまいましたわ。ヒナとハヤテと千桜さんはもちろん学校へ。マリアさんはちよつとした用事で、朝から外出。（出て行く姿は見てませんが）夜まで帰ってこないそうです。

…つまり、私の他にこのアパートにいる人間はいないという事なのです…ただ一人を除いて。

コンコン

「ナギさん、いらつしやいますか？」

部屋の扉をノックしても返事が無い。ただの空室のようですね…っていいえ、あの方が普通に起きて学校だなんてあり得ませんわ！

「ちよつと、ナギさん！入りますわよ！！」

と言いなからズカズカと入っていきますと…やはり、中には布団にうづくまる大家さんの姿がありました。こちらもあい変わらず HIKIKOMORI 全開ですわね。

「ナギさん！起きてください！大事件ですわよ！！」

「うくんムニヤムニヤ 映画化なんて幻想か〜ムニヤラ」

「アニメ3期も大事件も現実ですわよ！！」

「なにー！…って、アリスじゃないか。こんな朝早くにどうしたと言うのだ？」

「朝早く」なんてどの口がおっしゃいますか…。おっと、そんなツツコミより事件の方が大事ですわね。

「おはようございます、ナギさん。落ち着いて聞いてください。今、このアパートには…私と貴女しかいないのです！」

「ふん…」

「何をのんきにしてらつしやるのですか！？私たち二人でなんて、どうやって昼食の用意をすれば…」

「見くびるなよ、お姫様！！」

「！！」

いわゆるドヤ顔で私の前に立ちふさがるナギさん。お、寝起きだというのに急に頼もしく見えてきましたわ。さすがに今の私の倍の年齢だと言えますね…。

「誰もいないなら…寝ながら帰りを待てば良いではない

か！」

ズコ

この私をギャクまんがのようにコケさせるとは…さすがは三千院家のご令嬢。そこにシビれもしませんし、憧れもしませんけど。それにしてもダメですわこいつ…早くなんとかしませんと…。

「じよ、冗談だ！昼メシくらい、この私に任せろ!!」

「ジト」

さすがにこのドン引きの視線を送れば、日和ってくれましたわね…。でも、事態としては一つも前に進んでないような気がします。

「さて、着替えも済んだ！アリスよ、これから私は千桜直伝の究極奥義を使うぞ!!」

「…して、その究極奥義とやらは何でしょうか？」

「フフフ、聞いて驚くな…コンビニ弁当だぞ!!」

…

「まあ、昼食さえ調達出来れば良いですからね…」

「頼む、ソコはツツコんでくれ…」

マリアさんが出かけるのに、私たちの昼食の用意をしてない事は少々不自然に思いましたが（毎日本当にありがとうございます）、実はナギさんが「コンビニに一人で行ってみたい」と事前に言っていたそうなのです。

「さあアリスお嬢様よ、何でも食べたいものを言ってくれ！」

「…では、焼きそばを」

以前、ヒナが昼食に作ってくれた焼きそばがとても美味しくて、それから私の好物になりました。ちなみにハヤテとマリアさんにも別の日に作ってもらいましたが、それぞれ味付けの好みが違うようです。

「なに、そんなもので良いのか？任せておくアルよ！」

「ある…？」

「すまん、聞かなかった事にしてくれ…では、お留守番頼んだぞ！」

「はい…早く帰って来てくださいね？」

「ああ。…三千院ナギ、ガン●ムスロー●ド●イ、行きまーす!!」

なんだかよく分からない事を言いながら行ってしまいました。

そしてついにアパートには私一人となってしまうた。一人きりは慣れっこでしたが、最近のココの賑やかさを思い出すと少々寂しいですわね…。

ピンポーン

アンニユイな気持ちから我に返させる呼び鈴。少し寂しかった所ですし、ちょうど良いタイミングですわ。

ピンポンピンポンピンポーン

「はいはい！」

と扉を開いた瞬間、稲妻が走り土砂降りの雨が降り出しました。

「新聞を取ってください」

「え!？」

何ですかこの世紀末な感じの方々は!？新聞？意味が分かりません！

というか、つい一瞬前まで快晴でしたわよね？

「新聞を取ってください」

「えと…今は主人が留守ですので…」

「ホホホ、たとえ世界が破滅しても新聞を取らなそうな顔をしてるね。傘も差さずに勧誘する…みじめな姿はしれた事。しかしこうして自然の音を直に感じる…これが一番の音楽だと気付く…」

さあ、新聞を取ってください」

ダメだ、何も聞いてませんわ!今の姿の私に新聞だなんて、いったい何を考えてるのでしょうか？

「すみませんが、子供の私では…」

「頑かたく々な女だね…頑かたく々な女は全滅したと聞いたが、まさかこの関東に生き残ってたとはね…彦六!!」

「へい！」

「こうなったら、アレをお見舞いしな!!」

「クッククク…」

「ひころく」とか呼ばれた手下っぽい世紀末な方が前に出てきました。そのトゲトゲしい服で私は何をされるというのですの!!?

「ベ●スターズ戦のチケットです」

「ほえ？」

「フフフ…では、パパとママよろしく…」

去ってしまいました。野球のチケットを残して…。(いつだったか「ミル●イホームズのライブを試合でやってた、行きたい!」とか言ってたから、ナギさんと千桜さんにあげるとしますか)そして天気はまた快晴になりました。

これはいったい…

それから10分後

「おーい、帰ったぞ!!」

「おかえりなさい、ナギさん」

「それより聞いてくれ!帰り道に凄い連中とすれ違ったぞ。それはもうもはや世紀末といった感じの…」

何故だか知りませんが、ナギさんの口調はとてもエキ



サイトな感じです。あーいった方々に憧れてるのでしょ  
うか…？

「私も南斗五車星の一角の娘として一戦交えてみたいと  
ころだったけど、持病のシヤクが…」

「……」

もう私もお腹が空いて少し気が立っているのでツッコ  
みません。こうなったら自分で本題に入るしか無さそう  
です。

「ナギさん、そんな事よりもお昼食はまだでしょうか？」

「おお、すまんすまん。アリスはこれだったな…ホレ！」

と、ようやく渡されるはコンビニの袋。やっと昼食に  
ありつける訳ですわね…。

「ありがとうございます…：…ん!!？」

容器を開けてみると、そこには焼き魚が一尾。少々展  
開についていけません…：まさか！まさかとは思います  
が…！

「ナギさん…これって…？」

「ん？焼き鯖(さば)だぞ」

「私がお願いしたのは…？」

「え？焼き鯖だろ？」

「焼きそばですわよ!!!」

「もしかして…聞き間違えちゃったか？メンゴメンゴ」

「そんなカワイイレベルの問題じゃありませんわ！ゆゆ  
しき問題です事よ!!」

や…やはりナギさんの聞き間違えですか…。それにし  
ても、よくコンビニに焼き鯖なんてありましたわね…。

まあ、ナギさんも悪気があった訳じゃありませんし、  
犠牲になった鯖の命のためにも頂く事にしましょうか。

「はあ…せっかく買って来て頂いたので、これを頂きま  
すわ…それで、ご飯のほうは？」

「ん？…どゆこと？」

「白メシですわよ!!!」

「え、いや…そんだけだが…」

「単品で食べるとおっしゃるのですか!？」

「いや、だってアリスが焼き鯖って言ったから…」

「焼きそばですわよ!!!」

「焼いた!ソバ!ですわよ!!」

「でも、ホラこーゆー事件もブログとかに書いて消費すれば…」

「コンピューターもってませんわよ!」

「えーっと…じゃあ、鯖で!」

「鯖あーあーあーっ!!」↑叫ばずにはいられません。

「だいいちナギさんには前々からイライラしてたのです!ハヤテが毎朝毎朝起こしに来るのにサボってばかり!少しは自分で起きるとかしたらいかがですか、この引きこもり!!」

カチーン

「…私が引きこもりなのとアリスが鯖を食うのは全然関係無くないか?」

「全然関係ありますわよ!」

「何だよ!?言ってみろ!!」

「引きこもりだから、鯖単品を不思議と思わずに買ってくるんでしよう!!」

「…だああああ!!」

さあ、ここから引きこもりとの熱い熱いバトル展開が始まります。乞うご期待!ですわ。

「聞き違いくらい、誰だつてあるだろ!?!それをネチネチと心がせまいぞ!引きこもりじゃないし!!」

「この幼少の身体に昼食は死活問題ですわ!引きこもりには分からないでしょうけどね!」

「引きこもりじゃないし」

「言っておきますけどね、今度からナギさんは絶対起こして差し上げませんわよ!?!」

「はいはいそりゃ結構!アリスが起きられなくても起こ

してあげないぞ!!」

「誰が貴女みたいな引きこもりに起こされると言うのですか!」

「引きこもりじゃないし!」

-----

「お話の続きだけど、ごめんなさい。桂ヒナギクよ!

いきなりだけど、むかし戦から五十歩逃げた兵士が、百歩逃げた兵士の事を笑ったという事があったの。

でも、五十歩逃げた兵士も『逃げた』事には変わらないということ、『程度の差はあっても本質的には変わらない』という意味で『五十歩百歩』という言葉が生まれたわ。日本のことわざの『どんぐりの背比べ』も同様の意味になるわね。

…ひよっとして今回の私の出番ってココだけかしら?」

-----

「引きこもり引きこもりうるさいぞ!お前だってハヤテやヒナギクがいないと何も出来ないじゃないか!!」

「私は子供ですわよ!貴女の半分にも満たない年頃です

わ!!…それにしても何なんですか、いつも描いているあのマンガは!!アホですか!!」

「な、な、なん…だと…もういつペン言ってみろ!」

「何度でも言って差し上げますわよ!アホですかアホですかアホですか!!」

「こ…の…アホでも引きこもりでもない!!ほら、お前が頼んだ焼き鯖だ!!文句を言わずにさっさと食べ!!」

「焼きそばでしょうが!!!」

「だああ、もう!!そんなに焼きそばが好きなんだったら

…私がハヤテに習って作ってやらない事も…無いぞ?」

・・・・↑微妙な間

「な、な、な…何を言ってるんですの!?!…でも、貴女のそういうポジティブな所…嫌いではありませんわよ?」

・・・↑微妙な間2

「は、はあく!?何言ってるんだ!...可愛いくせに!!」

「うるさいですわ!この...ツンデレの天才!いえ、天才のツンデレ!!」

「そっちこそお姫様のツンデレのくせに」

「そっちこそ可愛いくせに!」

「そっちこそ可愛いくせに!...アーちゃん!!」

「逆にそっちこそ可愛いくせに!...なら貴女はナーちゃんですわ!!」

・・・↑微妙な間3

いつの間にか、私たちは固い握手を結んでいました。

これが親友。これが心の友。昼食というものは、こんなにも素晴らしいモノをプレゼントしてくれるんですね!

これからの生活が、ますます楽しみになってしまますわね♪

「ただいまー!アリスとナギ二人だけだったわよね?すぐにご飯作るから待っててね♪」

「おかえり、ヒナ(ギク)」

こんには、桂ヒナギクです。変なことわざの紹介だけで出番が終わらず一安心してます♪

今日はアリスとナギとで留守番していて、私の他の住人はみんな夜の帰りになってしまふとの事で、私が夕食当番。二つ持っていた買い物袋の片方を持ってくれるアリスの姿に、疲れが少し癒された気がした。

「フッフ、慌てる必要は無いぞヒナギク!なあアーちゃん!」

「ですわね、ナーちゃん!私たち二人ならお腹を満たす事くらい、朝メシ前ですわ!」

「:ん?なんだか良く分からないけど、焼きそば作ろうかと思って買い物してきたけど食べないのね?」

「それとコレとは!」

「話が別ですわ!...お願いしますヒナ」

仲良く揃って私に土下座する二人。なんだか、昨日までとはちよつと違った雰囲気ね...

「なんか、急に貴女たち仲良くなったわね?そんな呼び方してたかしら?」



「よくぞ聞いてくれた！私たちは二人で今日の昼メシという修羅場を潜り抜けた！」

「ですから、もはや戦友：固い絆で結ばれているのですわ！」

「そ、そーなんだ：」

プリ●ユアの決めポーズを見せる二人に、私は苦笑いしか返す事が出来なかつた。でもよくよく考えてみると、アリスはアパートの住人（私とハヤテ君を除く）とコミニケーションが少ないような気がしたからコレは良い事かもしれないわね。

「よし、アーちゃん。ハヤテが帰ってきたら、とりあえずちよっかいかけるゾ！」

「なぜちよっかいをかけるか理由がさっぱりですが、がつてんしようちのすけですわ！」

二人の異次元な会話を聞いていたら、いつだったかアリスに「住むと決めたからには楽しまないと損だ」とか言われた事を思い出した。これからのこのアパートでの暮らしがこの二人によって劇的に変わる事を、のんきに焼きそばを作る私は知る由も無かつた。

…って、一体私の身に何が起こるって言うのよ!?

おわり

## くのいち vs カウガール？

著者…R I D E

それは、とある日の白皇学園でのこと。

「退屈ですわね…」

アテネは、ため息をついていた。

ここ最近、大きな騒ぎというものは無い。事件がないのはいいことだが、心が躍るような、行事やら祭りやらというものもない。

「ここは、心機一転できる事を行わないと…」

ふと思ったアテネは、生徒会室の方へと足を進めていた。

「そうですね、何か面白いことがあればいいんですけど…」

生徒会室には愛歌がいた。彼女もアテネの考えに賛同していた。

「ですから、こんなことはどうかと…」

アテネが考案したアイデアを聞き、愛歌は頷いた。

「いいですわね、それ」

そして突如発表されたそれ。

白皇学園の当て大会 忍者対ガンマン。

ルールは簡単。的を当ててその得点を競うもの。

ただし、この競技に出る者は忍者かガンマン、どちらかを選択すること。そして、忍者は手裏剣、ガンマンは用意された銃弾で的を当てなければならぬこと。

また、的は通常は銀色だが、まれに金色の的が出現することがある。銀色に比べて小さいために当てることは難しいが、その分高得点が与えられる。

「というのを白皇でやるみたいですよ」

チラシを見ながら、ハヤテはナギと共に歩いていた。

「白皇も本当に暇だな」

ナギは呆れていた。こんなことをやるなんて白皇のトップはアホとしか言いようがない。一体何を考えているのだろうか。

こんなことにだれが参加するのだろうか。

「ちなみに賞品は、デートスポットのペアチケットみたいですね」

その言葉は、ナギの耳から頭へと素早く浸透していった。

デート。

ペア。

優勝すれば二人きり。

「この大会に出るぞ、ハヤテ！」

この誘惑に、ナギは即効負けた。

「え、お嬢様でるんですか？」

ハヤテは懐疑的な目で主人を見ていた。ナギの運動音痴では、的を狙っても当てることはできないのは目に見えている。

だが、ナギの意志は固かった。

「出るといった出るんだ！そして出るからには優勝する」

そして、一度言い出したなら二度と曲げるようなことはしないというのもわかりきっている。毎度のことながらこれもこれで困った性格だ。

厄介なことにならないければいいがと心配するハヤテをよそに、ナギの脳内ではすでに自分の優勝が確定し、ハヤテとのデートシーンがあれやこれやと浮かばせているのであった。

一方、生徒会室。

「まったく、天王州さんも愛歌さんも何考えているの」

ヒナギクは呆れていた。理由はもちろん、発表されたばかりの忍者対ガンマンのイベントに対してだ。

「キリカさんみたいなことしちゃって……」

暇つぶしで全校生徒を巻き込んだイベントを開こうなんて、迷惑でしかない。学校全体の授業計画やら何やらが色々と狂ってしまうではないか。

「けど、こんな大会に誰が参加するんだ？」

千桜の言うことももつともだ。高校生がこんなことに参加するとは到底思えない。

それがまたヒナギクを苛立たせていた。参加する人の見込みがないのにこんな茶番をしようとなんて、はっきり言って時間の無駄なのである。

「即刻停止させないと……」

「残念だけど、それは無理よ」

いつの間にか、生徒会室には愛歌の姿があった。

「そして生徒会長であるあなたには、強制的にこのイベントに参加してもらおうわ」

「何勝手なことしてんのよ！」

やめろと言っている人間に、何故参加させるのか。面



白半分だろうが、強制参加と言われようがこんなイベントやるつもりなどヒナギクにはなかった。

そんな彼女に、愛歌は言った。

「優勝すれば、デートスポットのペアチケットが貰えるのに……」

「え……？」

すると、ヒナギクは少し黙ってしまった。

もし自分が優勝すれば、ペアチケットは自分のもの。

折角貰ったんだから、使わなければならぬ。

そして、一緒に行く相手は……

「うーん……」

ハヤテとのデートを妄想にヒナギクは夢中なようだ。

これを見て、彼女は必ず参加すると確信した愛歌であった。

そして、イベント当日。

「さあ、やって参りました忍者対ガンマン！」

会場に、雪路の実況が響き渡る。

競技に出る者たちは皆、準備を進めていた。

ここにも、その一人がいた。

「ねえ、本当に私が出るの？」

泉はいつの間にか自分を出場登録させた美希と理沙に訴えていた。

彼女の姿は、競技に出るための衣装、つまりカウガールとなっていた。テンガロンハットにミニスカート、へそ出しスタイルとなっている。

「いや、実にいい姿だな」

「うむ、似合っているぞ」

泉は衣装については文句はないが、これで人前になるなんていうのは彼女としては結構恥ずかしい。

そんな彼女をよそに、美希と理沙はビデオカメラで泉の姿を撮っていた。まるでそれが目当てだというように。

「いい映像が撮れるな」

「うむ、期待しているぞ泉」

やっぱそれが目的のようだ。

「もー、二人ともただビデオ撮りたいだけじゃん！」

「いやいや、おまえも面白そうだとか言っていたじゃないか」

確かにそれは言った。しかしそれは観戦する側としてであり、自分は参加するつもりなどない。そもそも自分がやっても、優勝は愚かしい結果なんて残せるわけがない。

「それに、おまえも優勝賞品のペアチケット欲しいじゃ

ないか？」

「そ、そんなの別に…」

優勝する見込みがないのだから、そんなの手に入るわけがない。

だが、もしそれが手に入ったら…。

一緒に行く相手は…。

「にやああああ！」

自分で妄想して、勝手に赤くなる泉。

そんな彼女を見て、美希と理沙は更に面白がるのであった。

遂に、競技開始の時間となった。

ガンマンや忍者の衣装を着た選手たちが、次々と的を射ぬこうとする。それを見て、ああ参加する人結構いるんだなとハヤテは思う。

白皇は、やっぱりおしまいかもしれない。まあ、やる気があるのだから口にはできないが。

自分の身近にも、やる気になっていいる人がいるのだから。

「見ているハヤテ、必ず優勝して見せるからな」

カウガールのナギは、拳銃片手に勇んでいた。こちら

はノースリーブのベストにホットパンツ、スカーフといった格好だ。

カウガールを選択したのは正解だった。ナギの腕力では、手裏剣を遠くへ飛ばすことなど不可能だ。銃ならば、上手く標的を狙えば後は問題ない。

ハヤテとのデートがかかっているため、絶対に負けたくない。

ナギの出番は一番最初だ。

射的場に立ったナギは狙いを定め、感情をこめてトリガーを引いた。

だが。

「うわあ！」

弾丸を発射した反動がナギには抑えることができず、銃がナギの手からこぼれおちてしまう。

弾丸は、明後日の方へと飛んで行った。

これにはナギだけじゃなく、ハヤテも、そして参加者も驚いた。

「あ、あれって本物の銃…!？」

「本物というわけじゃないわ」

周囲と共に言葉失っている雪路の隣に座っている、解説役の愛歌が笑顔で説明してくれた。

「弾が当たっても殺傷がないよう、本物に限りなく近く

改造したのよ」

何故、本物に近いようにしたんだ。

それでも結構物騒なものである。

選手を含めその場にいた者たちは戦慄を覚えた。

とにかく、本物に近い銃を一般的な高校生が扱えるわけもなく、ガンマン側の選手の大半は棄権し、競技に参加しても大した結果は残せなかった。

事実、ナギも泉も中々に当てることができなかった。

では忍者側が有利かと言うと、こちらもそうでもない。

手裏剣を飛ばすというのはそう容易くない。それを狙った的に当てるというのだから結構難しい。

たいていの忍者側の選手は的に届かないか、的からかなり外れたところへと当たってしまったっている。

しかし、そんな中目まぐるしい成績を残している者もいた。

「おおっと桂選手、またもや全弾命中！」

くのいちの衣装を着たヒナギクであった。

「金の的も取りこぼさない！完璧な手裏剣さばきだ！」

他を圧倒する彼女の手裏剣は、皆を魅了するものがあった。

しかし、それ以上に引きつけるのは、彼女の衣装であった。

髪は邪魔にならないよう結んである。くのいちの衣装も、胸元が大きく開いてさらしが見える。丈も短く、スリットが大きく見えそうだ。

男子生徒の視線を釘づけにしているヒナギクは、順調に準決勝まで勝ち進んでいた。

待ち時間の中。

「あ、ヒナギクさん」

「は、ハヤテ君！」

ヒナギクはハヤテと対面してしまった。

「すごいですねヒナギクさん。ほとんどの的を全て見事に当てているじゃないですか」

称賛するハヤテだが、ヒナギクは気が気でない。

それも、こんな恰好でハヤテと会ったからだ。はつきり言って恥ずかしい。

「あ、あのハヤテ君…ナギは？」

なんとかそのことに触れないように、ヒナギクは話題をそらそうとする。

「お嬢様は観戦しています。負けたショックはまだ抜けでないようですが」

ハヤテは苦笑している。結果は目に見えていたが、折角やる気になっていたのだから応援していた側としても少しは落ち込んでいた。

「それにしても、ヒナギクさんまでくのいちの恰好して出るとは思いませんでした」

思わずヒナギクは身を竦んでしまった。

羞恥心がこみ上げてくる。今にもハヤテをしびき倒したい。

「くのいちのヒナギクさん、すごく感動しました」

それを聞いて、今度は今度は硬直した。

「…今、なんて？」

「え？いえ、くのいちで手裏剣を投げるヒナギクさん、すごく素敵だなんて」

素敵だな。

その言葉が、ヒナギクの心に大きく響いた。

「ハヤテ君」

ヒナギクは俯かせた顔を上げ、ハヤテに向かって微笑んだ。

「次の試合も、私活躍するから応援してね」

その笑顔に、ハヤテは少しときめく。

「あ、はい。がんばってください」

「うん。それじゃあ私行くから」

ヒナギクは上機嫌で去っていった。

今の彼女は気分がいい。次の試合だって楽勝に違いな  
い。そして優勝すれば、彼とのデートを誘おう。

まあ、ハヤテが了承してくれるかどうかはわからないが。

ところが、準決勝。

ヒナギクは意外と苦戦していた。

「中々やるわね…」

相手も同じくのいちだった。胸元を大きく開いて、自分よりも遥かに大きいことを強調させている。スリットも艶めかしく、自分と違って色気というものを漂わせている。

口元を隠しているため、顔はよくわからない。しかし、ここまで失投はほぼなしときている。

自分もまだミスはないが、こうなると少しでも集中力を切らしたら負けだ。

くのいちらしく、忍耐が勝負の決め手となった。

息を呑む激闘が、長時間続いていた。

そして、ついに勝敗が決した。

「勝者、謎のくのいちー！」

僅かの差で、謎のくのいちが勝った。

ヒナギクは悔しそうにしたが、すぐにそんな表情を消して相手に向いた。

「すごいですね。これだけの得点残せるなんて」

「いえ、意外と楽しめましたし」

謎のくのいちはその言うて去っていく。彼女は誰にも聞こえない声で呟く。

「ナギのサポートをするつもりできましたけど、意外と楽しいですね」

そのくのいちについて、遠くの観客席から見ていたハヤテには心当たりがあった。

「あれって、マリアさん…」

十分あり得るなとハヤテは思った。マリアはコスプレしてまで白皇に来たことがある。今回もそうやって参加しに来たのだろう。

本当、暇なんだなと本人が聞けば否定するようなことをハヤテは思ってしまった。

そして、決勝戦が始まろうとしている。

謎のくのいちはずでに登場している。

そして、彼女の前に立ちはだかるのは…。

「ふふ、よくここまで勝ち上がってこれたわね」

セクシーさを強調した青いレザーのボトムとホットパンツを着込んだカウガールのアテネであった。

「でも残念だけど、優勝は渡さないわ」

自信满满という態度を見せるアテネ。それもそのはず、彼女が残してきたこれまでの成績はトップで、女王の貫録を見せつけていた。この女に勝てる者はいない。戦った選手たちは皆そう感じさせられていた。

しかし、対するくのいちも、ハイスペックを誇っている。

「行きますわよ！」

「望むところですわ！」

熾烈を極めるだろう決勝戦が、始まろうとしていた。

終

おまけ

モバゲー控室。

「今年もまたトナカイの衣装なのかな…」

瀬川泉はクリスマスイベントの衣装について複雑な顔をしていた。彼女は去年のクリスマスではトナカイの衣装を着ていた。他のものはサンタであったのだが、彼女一人だけはトナカイであり、疎外感を感じていた。

「可愛い恰好ということじゃないんだけど…」

そんなことを言っている内に、彼女の元へ今年の衣装が届けられた。

確認してみると、それはサンタの衣装であった。

「あれ？トナカイじゃないんだ」

別の控室。

「シャ、シャルナちゃんそれはなんですか…？」

トナカイの衣装を手に持っている文は戦慄していた。彼女の前には、鞭を持ったサンタ姿のシャルナがいた。

「何って、トナカイの手綱のかわりよ」

そう言って、文を見事に縛り上げる。

「さあ、プレゼントを配るためにそりを引いて、文ちゃん」

「シャルナちゃん、ちよつと待ってください！」

涙目になりながら、それでも必死に前へと進もうとする文。

「や、やっぱ無理です！そもそもシャルナちゃんが乗っているので重…」

景気の良い音が、文の頭から響いたのであった。

## あの頃には戻れない

著者…双剣士

四月一日(土)

四月一日(金)

ある方からの紹介で、今日から住み込みの執事を一人雇うことになりましたわ。

マキナという名の、まだ幼い男の子。口だけは達者なのだけれど、これまで執事としての教育など何も受けてこなかった感じの子ですわ。

自由気ままな異国の一人暮らしをもう少し堪能したい気もしますが、これも何かの縁、話し相手になつてくれる子が一人くらい傍に居てもいいですわよね。

マキナの成長を見守るために、今日から日記をつけてみることにしましょう。教えなきゃならないことが沢山ありすぎて大変ですけれど、楽しい時はあつという間に過ぎてしまうと云いますし。

今日はマキナと一緒にお屋敷のお散歩。広い広い言つてマキナは目を輝かせていたけど、これからあなたが一人で掃除をするのよと言つてあげたら、青ざめた顔で許しを求めるような瞳を私に向けてきましたわ。

広いと言つても私とマキナの他には誰も住んでいないのだから、全部の部屋を毎朝毎晩隅々まで掃除をする必要は無いのだけれど……あえて何も言わずに微笑んでみせたら、あの子ったら不安そうにこう言うの。

「なあ、掃除をさぼったりしたらアテネはオレのこと嫌いになるのか？」

何も答えずに背中を向けたのは、ちよつと意地悪だったかしら？ でも躰しほけは最初が肝心ですものね、これであの子が真剣に働いてくれるといいのだけれど。

四月四日(月)

マキナは本当によく食べる子。まだお箸が上手に使えないのでフォークを両手に持ってお皿にかぶりつくような食べ方だけど、私が紅茶を一口飲んでるうちに二皿や三皿が空になっていくみたいだな大食漢ぶりですわ。

危ないからまだお料理は教えていないのだけど、本人がこれだけ食べるのが好きなのなら、きっと上達も早いんじゃないかな。

そうそう、マキナに意外な特技が見つかりましたわ。あの子ってテレビ番組の録画とかエアコンの調整とか、機械いじりのことならスラスラと覚えられるらしいですの。あんなにややこしい操作を尻込みせずに行われるなんてちよつと見直しましたわ。さすが男の子って所かしら。

ただ……ああやって水を得た魚のように元気に働いてる姿を見ると、小さかった頃のことを思い出して少し胸が痛みます。あのととき一緒に居た男の子も、ああやって一生懸命に働いてくれてましたわね……って。

四月九日(土)

だいぶこのお屋敷での暮らしにも慣れ、いちいち言わなくても朝食のパンの用意や就寝前のベッドメイクくらいは出来るようになったマキナ。それ自体はいいことなのだけど……暇を見つけては私の執務室に入って来て、私に構ってもらおうとあれこれ話しかけてくる悪い癖があるみたい。こっちには理事長代理のキリカさんから承認と捺印を求める書類が毎日のように送られてくるって。いうのに、あんな風に覗き込まれたんじゃ仕事し辛くないませんわ。

仕方がないので、お小遣いを渡して買い物(兼)息抜きに行かせてみました。一人で外に行かせるのは多少不安でしたけれど、ハンバーガーを大量に買い込んで嬉しそうに帰ってきたマキナの顔を見たら心配したのが馬鹿馬鹿しくなりましたわ。

そう、心配のしすぎですわよね……あの頃とは違うんですもの。時間の流れの違う世界に行った男の子を独りぼっちで何日も待っていた、あの頃のような思いはもう沢山ですわ。



四月十一日(月)

今日は夜空さんがお屋敷に来てくれましたわ。一人暮らしは何かと不便だろうとマキナを紹介してくれた人。マキナが元気にやっているか様子を見に来てくれたんですって。

「マキナ、元気でやってる？ ちゃんとご飯食べてる？」

「おう夜空、オレは元気だぞ！ アテネは気前がいいからな、ちゃんと言うことを聞いていれば腹一杯食わせてくれるぞ！ オレは幸せだ！」

「そ、そう……天王州さん、頼りないかも知れないですけど、この子を存分にこき使ってくれていいですからね」  
「ええ、もちろんですわ」

理事長の職を捨てて異国に逃げてきた私に、ほどなく接触してきた歳の近い日本人。帝おじいさまの差し金で送り込まれた女性かしらと最初は警戒の目を向けたこともあったけれど、マキナとのやりとりを見ている限り、私の思い過ごしだったみたい。

「そうそうマキナ、あなたの好きなコレ、持ってきたよ」

夜空さんが取り出したのは黄緑色のハーブ。火を炊くと高原にきたような清々しい香りが部屋一杯に広がった。マキナはこの香りが大のお気に入りらしい。

「幾つか持ってきましたので、よろしかったらお使いくださいな」

夜空さんから受け取ったハーブをさっそくお屋敷中に備えに行くマキナ。あの子が喜ぶのはいいのだけれど、香りと言ったらその家特有のもですわよね？ ひよっとしたらマキナの里心を刺激しちゃうんじゃない？ ……そんな心配を私はつい冗談交じりで会話に乗せてみた。すると夜空さんは大笑いしながら手を振ってみせましたわ。

「大丈夫ですよ。優しい主人に巡り会えれば、あの子は昔の主人のことなんてケロッと忘れられる子ですから」

なぜそんなことが言い切れるのか不思議ではあったけれど、私は問い返すことが出来ませんでした。『昔の主人をケロッと忘れる』……その一言で、胸の奥にチクリと刺さるものを感じてしまったから。

四月十二日(火)

こうして自分の日記を読み返してみると、自分の未練がましさに赤面するばかりですわね。

曖昧な書き方を続けてもストレスが溜まるばかりだし比べられてるマキナにも悪いから……もやもやを昇華する意味で、ハヤテのことを書き出しておきましょう。

ハヤテが白皇学院に編入してきたのは、今年の一月のことでしたわ。

十年前に一時期一緒に暮らして、酷い別れ方をしてしまったハヤテ。出来ることならもう一度会って謝りたいけれど、彼が王城の力を持ち出した犯人なら、二度と私たちの前に現れることはないだろうと思っていました。そのハヤテが、帝おじいさまの孫娘の執事という立場で白皇学院に編入してきたのです。

十年間ずっと会いたい会いたいと思っていた相手だけれど、いざ『手を伸ばせば届く』距離になってみると、話しかける勇気がどうしても出せませんでした。

彼はきつと怒っているもの。私のことを恨んでいるはずだもの。もし昔のことを既に忘れているとしても、そ

れなら私と会うことは嫌な記憶を思い出させるだけなんでも。せっかく最悪の両親と離れて、お金持ちの家に雇われて平穏な生活を手に入れたのに、私が出て行って『王城の力を返せ』なんて言ったら、それが真実にせよ誤解にせよ今の幸せを失ってしまうのは明らかだもの。

帝おじいさまはしきりにハヤテにちよっかいを入れていたようだけど、逆に私は彼と顔を合わせるのが怖くて仕方ありませんでした。けど同じ敷地の学院に通っている限り、いつそれが起こってもおかしくない。生徒会長の桂さんとハヤテは親しいようだから、いずれ彼女の口から私の噂が伝わることもあり得るでしょう。そして何より、ハヤテの姿を学院で見かけるたびに胸を高鳴らせてる私自身が、いつ突拍子もない行動に出してしまうか分からない！

だから私は逃げてきたのです。春休みに入った途端に理事長代理のキリカさんに全てを押しつけて、单身このミコノ島の別荘に。

皮肉なものですわよね、ハヤテと顔を合わせないよう遠い異国に逃げてきたというのに、そこで雇ったマキナの背中にハヤテの面影を見てしまうなんて。

でも、それももう今日でお終いにしますわ。



四月二十四日(日)

マキナはすっかり大きくなって、家事のほとんどを任せきりに出来るようになりましたわ。お陰で私は例のハープのきいた部屋で、のんびりとしていられる。マキナが真の意味で私の助けになる日も、そう遠いことではないでしょう。

その代わりと言っては何だけれど、ハヤテの夢を毎晩のように見るようになりましたわ。夜だけじゃなく昼間にも、気がついたら彼との思い出ばかり心に浮かべて、うつらうつらしていることがあるみたい。マキナに心配そうに声を掛けられるまで自分でもそれに気づかないようなことが、ここ数日に何度も起こっているようですわね。

あの夢をきっかけに、閉じ込めていた記憶の箱に穴が空いてしまったのかしら？ それとも……日本を出てから一ヶ月ほどの間に自分でも抑えきれなくなってきたのかしらね、彼に会いたいという想いが。

四月二十六日(火)

マキナのことを書き記すつもりで始めた日記なのに、思い浮かぶのはハヤテのことばかり。彼に会いたくないという気持ちとは裏腹に、どうしても彼に会いたい、会わなくてはと言う気持ちがあんまり膨らんでいく。今更ハヤテに好きでいて欲しいなんて虫が良すぎる、三千院帝がやっているように利用する対象として接するだけではないのだ、彼が王城の力を取り戻す鍵なのは確かなのだから……そんな功利的で卑怯な考えさえ、頭の片隅に浮かんで消えている。

あれから十年間、独りでいることには耐えられた。神の力を望んだ罰だと分かっていたから我慢できた。だけど、ハヤテからあえて距離を取るようになってからというもの、私は徐々に壊れつつあるのかも知れない。

ああ、どうして十年も経った今頃になって、あなたは私の前に現れたんですの？

どれほど成功を重ねても欲しいものは手に入らない、愚かな私にそれを見せつけるように。

五月一日（日）

今日もあの夢を見た。私が戻るべき、あの城の夢を。  
早く道を……城への道を開かなくては。  
やはりそのためには……石を……。

そう、もはや手段など選んでは居られませんわ。

あの光の石が要る。我が力を取り戻すために、そして私を救い出してくれた方の手がかりを得るために、どうしても庭城への道を切り開かなくてはならないの。

そのためにハヤテが必要なのなら、個人的な感情は捨てなさい、アテネ。今まで天王州家の遺産を狙って沢山の大人たちが接触してきたけど、あなたは冷酷かつ容赦なしに利用して陥れて払いのけてきましたでしょう。それと同じ事をするだけのことよ。

今回たまたまそれが、幼い頃に少しかだけ縁のあった男の子だと言うだけ。そう、たったそれだけのことよ。

五月三日（火）

今日は三千院帝から、奇妙な手紙が届いた。どういふ風の吹き回しか、世界中にいたる遺産相続の候補者に手紙を送りつけているのだそうだ。

三千院家の遺産を相続する条件は、三千院ナギの執事である綾崎ハヤテを倒し、彼の持つ「王玉」という石を奪うか破壊すること。その石は三千院家の遺産を継ぐのに欠かせないものだから、と。

遺産相続者でない私にまでわざわざ手紙を届けに来ると言うことは、欲しければ実力で奪って見せる、と言う挑戦状のつもりだろう。しかもその綾崎ハヤテは、ナギの旅行にくっつく形で今まさにシロノス島に来ているのだそう。マキナは「そんなに金が要るのか？」などとズレた心配をしていたけれど、金などは問題ではない。あの石を持った男がこの地に来ている、それこそが重要なのだ。

好都合ではないか、天王州アテネ。あやうに接触する口実が出来る。

五月四日（水）

昨日の日記は一体なんですか？

こんなことを昨晩の私が書いたと言いますの？

マキナの悪戯にしては、手が込みすぎていますわよね。

私は本当に狂ってしまったのかも知れません。

どんな口実を使ってもハヤテに会いたい、躊躇<sup>ためら</sup>いを吹き飛ばすだけの理由さえあればいい……そんな気持ちでどんどん成長して、分裂してしまった人格の片方がときおり表に出るようになってきてしまった、ということかしら？

近頃うたた寝が多くなって記憶の無い時間が増えてきたのも、それと関係あるのかも知れませんわね。

そうと分かれば、裏の人格の暴走を止めなくてはなりません。

ハヤテに会いたくないと言ったら嘘になるけれど、裏の人格がいつ表に出てくるか分からないうえ、そしてその人格がハヤテのことを道具としか見ていないなら……そんな醜い姿を彼に見せるわけには行きませぬわ。

そう決意したばかりなのに。裏の人格を出さないよう神経を張りながら今日一日を過ごしていたというのに。

ハヤテ、どうしてあなたは、ふらりと私の庭に迷い込んだりするんですの？

部屋の中でうたた寝したら危ないと思って、夜の庭に出てきた途端にあなたが姿を現すんですもの。心臓が止まるかと思いましたが。「僕は綾崎ハヤテだよ！」十年ぶりにあなたの声を聞いたときには、これが夢なら醒めないでって思いましたわ。

でも今、私があなたのことを認めてしまったら……あなたが目の前に居ることを裏の人格に気づかせてしまったら、私はあなたに何をするか分からない。きっとあなたの大切なものを壊してしまう。

だから心を殺して、精一杯に知らんぷりをしましたわ。マキナがあなたに暴力を振るったときも、駆け寄りたいのを必死で我慢しましたわ。そして「次に来たらこの程度では済みませぬよ」と冷たく突き放しましたわ。

十年ぶりの再会がこんな形になってごめんなさい。でも、きっとこれで良かったのよね？

もう私たちは、あの頃には戻れないのだから。

五月五日（木）

今日はいろんな事がありましたわ。辛いことや悲しいこと、そして残酷な真実との対面も。

私が天王州アテネで居られるのは、今この瞬間が最後になるかも知れません。私が私でいられるうちに、今日あったことを書き記しておきましょう。すべてが終わった後、ハヤテや帝おじいさまに伝わることを祈って。

まず、裏の人格だと思っていたものは分裂した私ではありませんでした。私に取り憑いていたのは強欲の英霊、キング・ミダス。ハヤテの持つ王玉を使って王族の力を取り戻そうと、私の身体を利用していたのですわ。

昨日の夜にハヤテを黙って追い返したことがよっぽど悔しかったのでしょうか。あの後キング・ミダスの干渉は一線を越えてきました。私がうたた寝をしているときに表に出てくるだけではなく、強制的に私と入れ替わって天王州アテネとしての行動をするようになりました。そればかりか私が「私の考え」だと思っている部分にも、キング・ミダスの意思と記憶が露骨に混ざり込んでくるようになりました。

ハヤテが再びお屋敷を訪れて、マキナの手荒い歓迎を受けて傷だらけの身体でお屋敷に運び込まれたとき。私の中では彼にこのまま帰って欲しい思いと、早く王玉を奪い取ってしまいたい思いとが相克していました。彼にとって王玉を失うことが何を意味するか十分に分かっているのに、それを奪おうとしている自分が居る。いたたまれなくて逃げ出した私を、目を覚ましたハヤテは追いかけてくれました。そして十年前の恨み言など一つも言わず、楽しそうに近況を語ってくれたのです。

本来それは私が望んでいた状況のほう。十年間の時を超えて普通の旧友のように言葉を交わす、今の私にとっては十分すぎるほどの幸せのほう。それなのに……

私がこんなに、あなたのために苦しんでいるのに、あなたは楽しそうに語るのね、今のご主人のことを

私の悪い癖、ほんの小さな嫉妬心。

それが私の心のバランスを一気に崩してしまいました。気がつくといえ、私の身体を支配したキング・ミダスは、彼に向かってこんな酷い言葉を吐いていたのです。

「ああ、覚えているよ……あのとき殺しそびれた執事だ！」

五月六日（金）

そこから先のことは、記憶がすっぱり抜けています。

いつのまにかお屋敷は半壊し、ハヤテの姿も消えていました。隣ではマキナが幸せそうな顔でハンバーガーに囲まれて眠っていました。

この破壊跡がキング・ミダスの暴れた跡であること、そして逃げ延びたハヤテが再びここに現れること。記憶は無くても胸の奥に確信がありました。これだけの目に合ったのだから日本に逃げ帰ればいいのに。私のことを嫌いになって近づかなければいいのに。優しいご主人様の元で幸せに暮らしてくれればいいのに……心からそう望みながらも、それでもハヤテが戻ってきてくれることが間違いないことのように思えるのです。

もう私はあなたを傷つけることしかできないから。

意識があるうちに、自分で結着をつけることにするわ。

さようなら、ハ

おとぎ話のようなハッピーエンド、と言っているのでしょうか。

ハヤテのお陰で、私に取り憑いていたキング・ミダスは消えました。ハヤテは怪我を負いながらも生き残り、胸のしこりになっていたお兄様のその後も知れました。そして何より、素直な気持ちでハヤテと向き合い、言葉を交わすことが出来ました。

王玉は砕かれて王城の道は閉ざされました。その代償としてハヤテのご主人は遺産を失うことになってしまっただけで、ハヤテはそのことで私を一言も責めませんでした。それどころか「君にこの王玉は必要ないんだ」と慰めてくれるほどでした。

ただ……あまりに幸せすぎて、私は一瞬だけ夢を見てしまいました。このままハヤテと仲直りして、また昔のように一緒に暮らせたらって夢を。これほど彼に助けてもらっておきながら、このまま行けば自分の欲しいものがすべて手に入るかも知れないって言う、強欲で浅ましい夢を。

そして不意に気づきました。今のご主人を捨てて私と

勝手なことは許さん

我が大望の成就は目前なのだぞ



一緒に暮らす、それをハヤテに望むことは、キング・ミダスが力尽くでハヤテに強いたことと何の違いもないと言うことを。私はまたハヤテを意のままに動かそうとしていることを。しかも今度は自分のワガママで！

そんなことは出来ない、許されるわけがない。たとえハヤテが許してくれても私自身が許せない。だって……私はもう、ハヤテを傷つけないって決めたんですもの。

「私、日本には帰らないわ

だから、ここでお別れね

さようならハヤテ。会えて嬉しかったわ」

やっと素直にハヤテと話せるようになったのに、また嘘をつかなくてはならないなんて。

だけど、あなたは優しい人だから。放っておくと何もかもを背負ってしまったって、何一つ捨てられない人だから。だから今度は私の方から、あなたという暖かい揺りかごの外へと降りてあげますわ。

「だったら私と一緒にこの国に残る？」

一億五千万の借金も、私が肩代わりしてあげるわよ？

……ね、できないでしょ？」

こうして私は、ハヤテとの関係に終止符を打つことになりました。

ハヤテ、迷惑を掛けてばかりでごめんね。辛い思いを何度もさせてきたのに、大切なものを沢山もらったのに、最後まで嘘つきな私でごめんなさいね。あなたが目を通すことがないであろう日記の中でしか本心を語れない、弱虫で意地っ張りな私で本当にごめんね。

だけどこれだけは信じて。あなたとの別れ際に告げたこの言葉だけは、一点の曇りもない本心だから。

「私ね、あなたのことが好きだったのよ」

Fin.

## 著者あとがき & メッセージ

### 【kullちゃん】

どうも、サタン杯で優勝して運良く掲載させてもらえたkullです。  
本大会では強者の方々に全く及びませんでした。

ハヤテのごとくのキャラの中では千桜が一番好きなので、千桜メインの話を考えていたのですが、少し視点を変えてモブを主人公にしてみました。

テーマとしては、「今まで二次元にしか興味の無かったモブが、千桜を通して三次元の良さに気付く」です。

漫画やアニメの世界の女の子は皆可愛くて、僕も好きなキャラは多いです。

それでもやっぱり僕達が生きているのは三次元の世界なので、リアルに絶望せず生きていけたらいいなあと思い、この話を書きました。

千桜は思わせぶりな発言が多いので、モブが勘違いするのも分かりますね。  
僕も勘違いすると思います。

個人的には、モブが23歳なことに驚きました。

いつかアニメイトで理想の女性と出会いたいものですね。

## 【きはさん】

本作は小説掲示板にあるスレッド「[書き方議論スレ](#)」発新企画（企画名未定）「[作品募集中](#)」のテーマ（ピーすけさん提案のお題）を用いたものです。

一部改変している部分はありますが、極力元の文章を尊重して書かせていただいたつもりです。本作と合わせて見ると、より顕著に現れていると私なりに思っています。一部のシーンを切り取ったようなものなので、「ヤマなし・オチなし・イミなし」の三拍子となってしまうですが、ご了承ください。

なぜそんな作品を合同小説本に投稿したのだった？

……時間と実力が足りなかったからですよー（笑）

来年からは、ぼちぼち書き手として活動できればと思います。

ご愛読ありがとうございました。

## 【ロッキー・ラックーンさん】

こんにちは、ロッキー・ラックーンです。にゃんぱすー！

前回に続いて合同小説本に参加させて頂き、ありがとうございます。このあとがきを書いている今は雪が降っています。前回は夏の暑い時期だったのを考えると…時の流れが本当に早く感じます。

さて、SSについて。長らく止まっている連載「しあわせの花」より、アリスとナギの友情物語を転載させて頂きました。転載にあたり、一話完結で読めるような手直しを施しています。原作での肉まんのお話より前に思いついたもので、「金髪幼女が二人いるのに何も起こらないのかー！」と奮起したのを覚えています。

元ネタは、マンガ「日常」の3巻と7巻から。安中さんが新聞の契約を迫られるエピソードと、みおちゃんが焼きそばを頼んでいたのにゆっこが間違って焼き鯖を買ってきてしまったエピソード。ハヤテ29巻の「京アニがアニメ化とかしてない方の日常」というサブタイトルに触発されて、「なら『してる方』を書いちゃえばいいじゃん」と思っていたのが始まりです。これが2011年の事…うわぁ、改めて連載休止の長さに呆れます。

話は変わって、「日常」以外からのパロディの解説を…。

「ミルキイ●ームズのライブ」…2011年5月1日に横浜スタジアムで本当にライブやっています。ハヤテキャラがベイス戦に行きたくなるような要素を考えてみたら…という結果でした。

中の人ネタ「南斗五車星の一角の娘」「任せておくアルよ!」「ガ●ダムスロ●ネ●ライ」…釘宮病患者の皆様なら全部分かりますよね?今考えれば、アリスに「問おう、貴方が私のマスターか」なんて言わせるのもアリだったかも知れません…。

最後に挿絵について。自分の作品に絵がつくというのは本当に感動的なものですね。自分に絵心が無いだけに…。素晴らしい作品を本当にありがとうございました。

ではでは、読んで頂いた皆様、止まり木の皆様、挿絵にご協力頂いた皆様、ありがとうございました。またの機会にお会いしましょう。

## 【RIDEさん】

どうも。

…なんか、今までのものよりも短くなっちゃいました。

モバゲーでのイベントを題材にして色々書こうとしていましたが、自分ではこれが限界でした。

決勝戦を書かなかったのは、あまり詳しく掘り下げることがこれ以上難しかったです。だっတဲ့的当てじゃねえ…。

デート券を手に入れたのは誰なのか、それは想像に任せます。  
いつもながら不親切ですね…。  
それでは、楽しんでくれたら幸いです。

### 【双剣士】

初めまして、合同本初参加の双剣士と申します。  
今回は原作18〜25巻の「あのシーン」を題材にしてみました。  
これを機会に、SS書きとしての私を少しでも知っていただけたら望外の幸せです。

## 編集後記

クイズ大会の賞品のつもりで始めた合同小説本企画も、これで第三回目になりました。今回は師走時期ということもあり、前回や前々回よりもページ数が少なめですが、その分だけ作者の語りた部分をもっと詰めた力作が揃ってくれたと思っています。

ひなたのゆめが消滅して止まり木を作ったのは去年十月ですが、テーマ茶会やクイズ大会などチャット系での企画に力を入れ始めたのは今年に入ってから。毎週土曜の茶会参加やログ整理、三カ月に一回のクイズ大会準備と合同本編集作業……去年までは想像もしていなかった日々が始まりました。コミュ障で会話下手な私にどこまでできるのか、keiさんが管理人だった頃なら楽しく参加していたであろう人たちが一斉に背を向けて去って行ってしまわないか……そんな不安を抱えながらの一年でした。こうして沢山の皆さんに支えていただき、三冊目の合同本を発行できることを嬉しく思います。

次回、第四回のクイズ大会は来年三月末（春休みスペシャル）として開催予定です。第四回では敗者復活枠に加え、西沢賞（平均点ニアピン賞）も創設されます。奮ってご参加ください。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.03

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2013年12月22日